

【松本大洋】

今、松本大洋さんの漫画にはまっています。とにかく絵がうまい。うますぎて読みにくい。一見した入りにくさを乗り越えれば青春ものといっているいいストーリーはとっても面白い。

「鉄コン筋クリート」

このタイトルちょー言いにくい！シロとクロのお話。飛ぶ子供であるかれらはその能力を生かし宝町でかつあげをしながら暴力的に暮らしている。それでも無国籍で近未来的なその町に受け入れられているようだ。シロはクロの純粋な部分であり、後半で登場してくるイタチはクロの暗黒部分のようだ。もしかしてクロとシロとイタチはひとりの人間の内面を表しているのかもしれない。

2006年外人監督さんによってアニメ映画化。



「青い春」

つっぱり高校生の話。若者たちの一直線ぶりはなんだかちょっと恐い。あとがきで大洋氏は「理屈に対しては拳で答え、湧き上がる感情に対しては「なぜ」と問うことのないツッパリ君たちの本能はわたしの憧れであり一番身近にいたヒーローだったと思います」と語っている。わかる気がします。物事を判断したりする瞬間に理性や思考より本能で行動してしまう人はわたしにとっても魅力的です。その分のリスクはきっととても大きいでしょう。

「日本の兄弟」

ざ・たっちの風貌の双子の兄弟のお話。30才にして子供にしか見えない。でもこの双子は生まれながらにして世の中で大事なものは何かを知っていて実践している。「何も始まらなかった一日の終わりに」という連作も面白い。大洋氏の作品の登場人物たちはあまりに本能的で、常識人のわたしにはちょっと恐く感じたりしちゃう。

そこにまた惹かれるんだろうけど。



「ピンポン」



初めて読んだ大洋氏作品。卓球スポコン漫画。メガネをかけて知的なスマイルがとっても魅力的。クールなかれが唯一感情をあらわにするのが幼馴染のペコに関して。今は卓球に迷っているペコだけれど、スマイルにとっては小さい時からのヒーローなのだ。他にアクマと中国人留学生がお気に入り。2002年映画化。ペコを演じた窪塚洋介が前面に出ていたが漫画はスマイルが主役。中村獅堂はこの映画でブレイクした。大洋氏の名前を一気に有名にしたのは「花男」と思うけれど、これはまだ読んでいない。

【永島慎二】

1960年代～70年代にかけて漫画家を目指す者にとっては神様の存在だった。後に梶原一騎原作の「柔道一直線」を少年誌に描きテレビドラマ化もされ人気漫画家となるがそんな自分に嫌気が差し漫画も途中降板して漫画界からアニメ界へと転進する。アニメ的な絵柄で当時はアングル、コマ割など画期的でみんな真似したものでした。永島慎二と言えばその時代背景を抜きにしては語れず、そのためであるのか、かれの作品は一部のマニアを残し風化していく定めを持った。当時漫画少女だったわたしはもちろんかれの信奉者であったのだけれど、次第に永島作品を読み返すこともなくなってしまった。漫画家を目指して上京した同じ志の者達は何時間も喫茶店に集まり議論する。世の中から何ランクも下の表現方法と白い目で見られながら、なおいい漫画を描こうと若者達は自分を追い詰めていく。「フーテン」には当時の新宿の懐かしい喫茶店が多く登場する。「風月堂」「コボタン」「ピットイン」「DIG」「ボア」「木馬」。わたしも永島作品の登場人物と同じように、友人達と何時間もコーヒー一杯で語り合い、お金ができると「ドンガパチョ」や「ピテカントロプス」で飲み、「三平食堂」で定食を食べ、地方から出てきた友人のアパートでレッドの水割りなんぞを朝まで飲んだ。当時の待ち合わせの名所は二幸の前だった。今はアルタと名前を変えやっぱり名所であるのには変わらないが。ノスタルジックな雰囲気は今受けるのでは永島氏だって嫌なんじゃないかと思うけれど、永島作品は自分の思い出と共にある気がする。同時期に活躍したつげ義春作品は永島作品の対極に位置するように思う。つげ氏代表作「ねじ式」は1970年作品。当時も今も内容は？と問われれば返事に詰まる。永島氏が現実を描写したならつげ氏は自分の見た夢を描写したのではないか。つげ作品は共に歩く作品となり我が家の本棚に今もきちんと何冊も存在している。

「漫画家残酷物語 ～」

当時からこの作品が一番好きだった。中でも「蕩児の帰宅」「生きる」「遭難」「雪」なんかが好き。「陽だまり」も面白い。

「黄色い涙」

もともとのタイトルは「シリーズ黄色い涙・若者たち」だったがテレビドラマになったときに「黄色い涙」と変更された。今公開中の嵐の五人が主役の映画



の原作でもある。映画化の噂を聞き、読み返してみたくなって永島ファンの健さんに頼んで古本屋さんで買ってきてもらいました。

ファミマ限定「黄色い涙」

オリジナルメニュー。

これはおにぎりとかムです。

